

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月5日現在

機関番号：20101

研究種目：「基盤研究（C）」

研究期間：2010年度～2012年度

課題番号：22530867

研究課題名（和文）若年女性への「乳がん」教育による意識改革効果の検討

研究課題名（英文）The efficacy of breast cancer education for Japanese young females

研究代表者：大村 東生（OHMURA TOUSEI）

札幌医科大学・医学部・研究員

研究者番号：30295349

研究成果の概要（和文）：

今回の乳がん教育により、女子学生の乳がんの知識は有意に深まった。講演後のアンケートで、乳がん検診への意識・理解の変化が見られた。自己検診の正しい方法を知ることができた。乳がん教育により、若年女性の乳がん検診に対する意識・理解を高めることができると考えられた。今後もこのような乳がん教育を今後も継続して行うことが重要である。

研究成果の概要（英文）：

By breast cancer education, the knowledge of breast cancer of the young female students significantly deepened. A change of consciousness, the understanding for breast cancer screening was found in the questionnaire after the lecture. They could know the right method of the breast self-examination.

We thought that we were able to enhance the consciousness, the understanding of the breast cancer screening for the young women by breast cancer education.

It is very important to continue breast cancer education for young female students in future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成22年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成23年度	800,000	240,000	1,040,000
平成24年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育学、乳癌、検診、健康

1. 研究開始当初の背景

1960年代より現在まで、日本人乳癌患者症

例数の増加とともに乳癌による死亡数、死亡率の上昇が認められる。乳癌診療に関わる医療関係者の診療能力の向上および医療機器の進歩、新規抗がん剤の登場で、癌再発予防の効果および再発後の治療効果を認めるが、現状は死亡数増加の一途を辿っている。欧米の乳癌患者数は日本人に比べてはるかに多く、死亡数、死亡率も高い。欧米諸国は国策として乳がん検診を 1970 年代より取り入れ、乳癌の早期発見に努めてきた。欧米女性の乳がん検診への意識は高く、検診対象者の 60-80%の女性がマンモグラフィ検診を定期的に行っている。その結果、欧米の乳癌早期発見率は上昇し、死亡率の低下を認めた。一方、日本人女性においては乳がん検診への意識が薄く、検診率は 10-30%と低い。

女性の年間の癌罹患数は乳癌が最多であり、年間 60000~65000 人が乳癌を発症し、年々、増加傾向にある。死亡数は 2003 年 9855 人、2004 年は初めて 1 万人を超え、10609 人、2011 年は 12750 人と増加し、女性の癌では第 4 位である。また、30-65 歳の女性では死亡率は第一位である。社会的に活躍し、重要な世代の癌発症、死亡との観点から、乳癌は社会的癌といえる。その意味で乳癌の早期発見・治療の対策は日本医療の中でも重要な課題である。

乳癌の早期発見のために、日本国内では 2004 年より従来の触診法に加えて、マンモグラフィ (MMG) 検診 (40 歳以上) が導入された。これによって、乳癌の早期発見率の上昇とともに早期癌の割合が高くなっている。また、日本人女性およびアジア系女性は欧米女性と比べて、若い年代での乳癌発症が多いため、MMG のみならず、超音波 (US) 検診の有効性を検証する大規模な臨床試験 (J-START) が進行中である。さらに、日本乳癌検診学会、精度管理中央委員会、教育研修委員会が中心となり、MMG 講習会の普及で、乳癌診断に関与する医療者の診断能力が向上された。

以上のように、医療者の努力および乳がん啓蒙活動が年々、全国に広がりつつあるも、乳がん検診受診率は高い水準には達せず、乳癌死の減少という現象にはまだ実を結んでいない。

2. 研究の目的

本邦における乳癌死亡数・死亡率が上昇している大きな要因として乳がん検診受診率の低さが考えられる。その原因を解析するために乳がんに関する理解と意識調査を行う。また、若い世代の女性に対して「がん」(特に女性のがんー乳がん、子宮がん) についての知識・意識調査を行った後、カリキュラムに沿った講義および「命の大切さと乳がん」をテーマとしたパフォーマンスを行い、乳がん検診に対する意識改革を解析し、教育の意義、重要性を明らかにし、乳がん受診率向上への施策を示すことを目的とする。本研究により若年女性の病気 (特に乳がん) に対する関心、理解が高まり、乳がん検診 (自己検診、施設検診) を行う割合が上昇することが明らかになると期待される。

日本人女性の乳癌死亡数・死亡率が上昇している大きな要因として乳がん検診受診率の低さが考えられる。その原因を解析するために乳がん検診を受けたことのない女性、検診を受けるのを止めてしまった女性、定期的に検診を受けている女性に対して乳がんに関する理解と意識調査を行う。また、高校生、専門学校生、大学生の若い世代 (全て女性) に対して「がん」(特に女性のがんー乳がん、子宮がん) についての知識調査を行った後、カリキュラムに沿った講義および「命の大切さと乳がん」をテーマとしたパフォーマンスを行い、乳がんに対する理解を深め、講義およびパフォーマンス観賞後の乳がん検診に対す

る意識改革を解析し、教育の意義、重要性を明らかにし、乳がん受診率向上への施策を示すことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 乳がん検診に対する意識・理解度調査

20歳以上の無作為に抽出した約1000名の女性に病気（特に乳がん）についての理解度および乳がん検診に対する関心度をアンケート項目に基づいて1対1のインタビュー形式で調査する。その結果を統計学的に解析する。

①インタビュー方法

インタビューは乳腺専門医、乳腺認定医、乳がん検診に理解のある医師、一般女性、乳癌手術体験者よりなる。インタビューの一般女性、乳癌手術体験者はインタビューの前に乳がんについての知識を深めるための教育を受ける。抽出された女性と乳がんについての理解度および乳がん検診に対する関心度をアンケート項目に基づいてインタビュー形式で調査する。抽出される女性とは①健康診断のために健診施設を受診された女性、②一般講演会、医療講演会に参加された女性、③乳がん検診啓蒙活動の一環として開催される「ピンクリボン in Sapporo」参加者、④学校の母親学級等に参加された方、⑤街頭で協力の得られた方などである。

② 調査項目は以下の通りである。

- 1 年齢、2 家族の有無・構成、
- 3 職業の有無、4 病気の既往歴、
- 5 家族癌既往歴、6 近親者の乳癌既往状況、7 乳がん検診受診状況 8 乳癌についての理解度（疫学、診断、治療）
- 9 乳がん検診の理解度（方法、意義）
- 10 乳がん検診を受ける理由、受けない理由
- 11 病気に罹患した時の受け止めかた

12 乳癌になったときの受け止めかた

インタビューされる方は上記調査に理解を示し、協力の同意を得ることができた方で、調査員は研究責任者がインタビューとして適任と判断し、インタビューの方法・内容を理解し、習得した方とする。

(2) 高校生、専門学校生、大学生

（全て女性）約1000人を対象に生命に対する考え方、病気（特に乳がん）の理解度調査、「乳がん」の知識を深める講義を行う。また、札幌在住の劇団および乳がん患者会などの協力で、「命の大切さと乳がん」を主テーマにパフォーマンスを行う。講義およびパフォーマンスの前後で生命に対する考え方の変化、乳がん検診に関する意識の変化について調査を行う。

①「乳がん」の理解度調査

乳がんの疫学、乳がんの診断、治療についてアンケート・試験形式で理解度を調査する。

②「乳がん」の知識を深める講義

学校関係者のご理解と協力で乳腺専門医または乳腺認定医が学校で出張講義を行う。乳腺の発達、役割、病気、診断、治療について概説する。

③ 乳がん検診に関する意識調査

乳がん検診の方法、受診に対する意識調査をアンケート形式で調査する。家族、親戚へ乳がん検診を受けることを指導する。

④ 「命の大切さと乳がん」札幌在住

の劇団および乳がん患者会ボランティアによるパフォーマンスを行い、生命に対する考え方の変化、乳がん検診

に対する意識の変化についてアンケート形式で調査する。

- (3) 乳がん教育の効果により、乳がん検診受診への関心、理解が得られるかを解析する。

4. 研究成果

- (1) 札幌大通り公園周辺の歩行中の一般女性300名に対して、乳がん検診に対する意識、理解、意義についてのインタビューによるアンケート調査をおこなった。若年女性の乳がんに対する知識は少なく、30代ではやや多くなった。インタビューを通して、乳がん検診を希望された方が多くいた。

- (2) 2010年8月、2011年8月、2012年8月、Pink Ribbon in Sapporoを開催し、乳がん検診に対する啓蒙活動をおこなった。また、1年を通して、ラジオ番組およびイベント等への出演により広く女性へ乳がん検診の必要性を訴えた。北海道内では函館、紋別にピンクリボンの拠点が増えた。

- (3) これまで、約1700名（札幌市内の5つの大学、専門学校）の若年女性（20歳前後の女子学生）に対して「乳がんおよび子宮頸がん」についての知識・意識調査を行った後、カリキュラムに沿った講義および「命の大切さと乳がん」をテーマとしたパフォーマンスを行った。講義前後のアンケート・知識調査から、講義により乳がんの知識および検診に対する意識が高まり、将来、乳がん検診を希望する若年女性の割合が増えた。現在、それぞれのアンケート30項目に対する講義前後の結果について解析中である。

- (4) 乳がん検診率を高める施策として、検診適

齢期の40代-60代女性への啓蒙活動のみならず、20歳前後の若年女性に乳がんについて教育することが、将来の検診率を高めるために有用である。乳がんの知識を高めることで、自分のため、家族のための検診であることを、自覚させることが、今回の教育講義により判明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計4件)

1. 大村東生、九富五郎、亀嶋秀和、島 宏彰、男澤聖子、増岡秀次、平田公一、浅石和昭、石谷邦彦

若年女性に対する「乳がん講義」の教育効果 第22回日本乳癌検診学会総会 11.9-10.2012 那覇

2. 島 宏彰、大村東生、九富五郎、鈴木やすよ、亀嶋秀和、平田公一

若年女性に対する乳がん教育の効果 第21回日本乳癌検診学会総会 10.21.2011 岡山

3. 九富五郎、大村東生、鈴木やすよ、亀嶋秀和、島 宏彰、平田公一

若年女性に対する乳がん教育の効果 第9回日本乳癌学会北海道地方会 10.15.2011 札幌

4. Ohmura T., Kutomi G., Kameshima H., Shima H., Takamaru T., Satomi F., Suzuki Y., Otokozawa S., Hirata K

The efficacy of breast cancer education for japeanese young females Grobal Breast Cancer Conference 2011 10.7-8, 2011, Seoul, Korea

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大村 東生 (OHMURA TOUSEI)
札幌医科大学・医学部・研究員
研究者番号：30295349

(2) 研究分担者

平田 公一 (HIRATA KOICHI)
札幌医科大学・医学部・教授
研究者番号：50136959

鈴木 やすよ (SUZUKI YASUYO)
札幌医科大学・医学部・助教
研究者番号：60404604

九富 五郎 (KUTOMI GORO)
札幌医科大学・医学部・助教
研究者番号：10404625

亀嶋 秀和 (KAMESHIMA HIDEKAZU)
札幌医科大学・医学部・助教
研究者番号：80517912

(3) 連携研究者

()

研究者番号：